



6月7日、新たな記帳者14人が集し、全員による記帳が始まった



「皆さん、一緒に頑張らしよう」と先輩記帳者の中本さん(左)と大川さん(中央)。温かな笑顔に皆の肩の力がほぐれる。この後、名簿に向かいそと手を合わせ、全員が静かに筆を執った

「部活でする書道とは重みが違う」と林さん

一筆目は「緊張感と高揚感」と石丸さん

「日頃行っている賞状の筆耕とは異なり、鎮魂の思いを込めて」と林さん

昨年、被爆者の親族が死去。「背筋を正して筆を握る」と小林さん

「平和を伝える文字をと臨み、「最初の一文字を記す瞬間、心に染みた」と福地さん

特集 名前を残し、平和をつなぐ 原爆死没者名簿の記帳

原爆で亡くなった人の名前を記し、慰霊碑に奉納する「原爆死没者名簿」。今年、公募で選ばれた14人が名簿の記帳に加わります。

広島原爆被害対策部調査課(☎504-2191、☎504-2257)

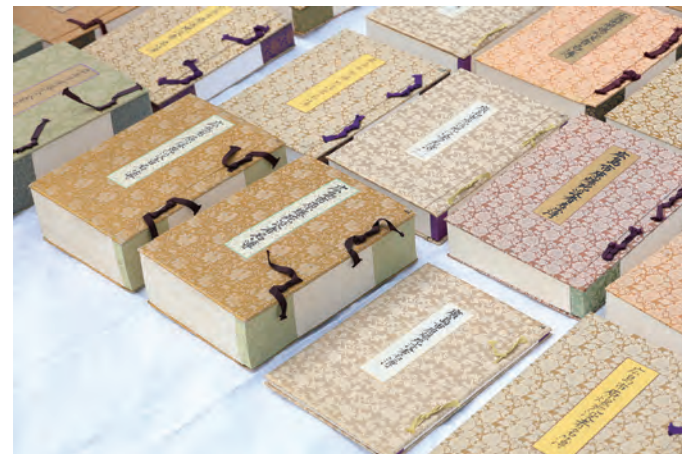
原爆死没者名簿とは

広島に投下された原子爆弾により死没した人やその後死没した人の霊を慰め、人類の恒久平和を祈念するため、死没した人の氏名・死没年月日・死没時年齢を登録しています。昭和27(1952)年に記帳を開始し、広島平和都市記念碑(原爆死没者慰霊碑)に奉納しており、名簿冊数は令和7年8月6日時点で130冊(「氏名不詳者多数」と記した名簿1冊を含む)、登載者数は34万9246人



記帳者の事前研修(5月20日(木))

①原爆死没者慰霊碑への黙とう②風通しの見学、③被爆体験講話の聴講、④平和記念資料館、⑤追悼平和祈念館、⑥原爆供養塔、爆心地の⑦島病院跡の見学



風通しの日に慰霊碑から取り出される原爆死没者名簿。1冊当たりの人数が固定ではなかった時代があったため厚さはさまざま。現在は1冊に2,500人記載

風通しの動画を市公式YouTubeチャンネルで配信しています



心を込めて名前を書く。平和を願う心を伝え続け、と語りかける。



記帳者の、後列左から三井野々香さん(18)、小林倫子さん(44)、末友由香さん(61)、清川優香さん(59)、寺尾一弘さん(59)、増井直さん(46)、林友紀さん(51)、中列左から寺升久子さん(70)、金坂良枝さん(51)、賤間悠理さん(19)、林沙羅さん(16)、右列左から石丸陽菜さん(17)、福地芽依さん(16)、佐伯靖子さん(61)、前列左から中本信子さん(84)、大川純子さん(84)

新たに16〜70歳の14人

6月7日(日)、原爆死没者名簿に、昨年8月6日以降に申し出があった原爆死没者の名前を書き加える「記帳」が本格的に始まりました。今年から新たに携わるのは、公募により選ばれた16歳から70歳の14人です。昨年まで25年続けてきた中本信子さんと昨年初めて担当した大川純子さんの二人も指導役を兼ねて名簿に向かい合います。

「特技を生かして」「いまできること」

これまで名簿の記帳は、市職員や市が依頼した被爆者が行ってきましたが、被爆者の高齢化などを背景に、今年初めて公募を行いました。186人の応募があり、小筆の実技や面接などを経て14人が新たな記帳者に決まりました。

最年少16歳、高校1年生の福地芽依さんは、選ばれた時は中学生。曾祖父が被爆者で、これまで平和記念公園で観光ボランティアを続けてきました。「名簿はその方々

の存在を未来へつなぐ大切なもの。八段を持つ習字で一文字一文字に思いを込め、追悼と平和への願いを心に刻みながら臨みたい」と力を込めます。寺尾一弘さんは、昨秋、被爆者だった父親を亡くしました。「いま自分にできることは何かと思っていた時に見つけたのが記帳者公募の記事。平和を祈り続けた父の意志をこの筆に込めたい」と決意を語ります。

今年、名簿に追加されるのは3,806人(6月末時点)。記帳者16人は、8月5日までの数日間、市役所で筆を握ります。名簿は8月6日の平和記念式典で、原爆死没者慰霊碑に奉納されます。

名簿を守り、悼む思いを新たに

名簿全てを慰霊碑から取り出し、ページをめくりながら風を通す行事「風通し」が行われた5月20日(木)。初夏の日差しが降り



注ぐ平和記念公園で、静かにページがめくられていきます。1ページずつ開いて風を通し異常がないか確かめる作業は、名簿を守るための点検であると同時に、亡くなった人を悼む思いを新たにする時間でもあります。

継承される名簿を間近に

今年の記帳開始を前に、記帳者の研修として、風通しの見学のほか、平和記念資料館や追悼平和祈念館の見学、被爆体験講話の聴講などが行われました(上写真)。

研修を終えた金坂良枝さんは「証言を直接聞くのは初めて。情景が浮かび、心に響いた。風通しを目の前で見て、自分が書く文字が後世に残るのだと思うと強い責任を感じる」と話しました。

記帳が始まったのは被爆7年後

この記帳は、いつ始まったのでしょうか。

昭和26(1951)年、市は、原爆死没者の霊を慰めるため、平和記念公園内に慰霊碑を建立し、名簿を奉納することとしました。名簿作成のため、国内全域にわたる調査を実施。翌年7月、市内の女子短期大学生20人により記帳が行われ、5万7902人の名前が記された15冊の名簿が完成しました。8月6日、慰霊碑が除幕され、碑内の奉納箱に納められました。



昭和27年の平和記念式典で奉納された名簿(左)と、そのとき参加した市立図書館所蔵の「原爆死没者名簿」(右)の写し

約6万人の名を20人で記帳

佐伯区に住む伊藤恒子さん(92・右写真)は、昭和27年の記帳に携わった一人です。74年後の後輩たちを激励しようと、記帳の場を訪れました。県北の比和町(現庄原市)で生まれ育った



伊藤さんは、81年前の米軍による原爆投下時は国民学校6年生。「教員だった兄が8月5日から広島を訪れていて。大やけどを負い、必死で看病しました」。

20人で約6万人の氏名を書き上げた当時は、広島女子短大(現県立広島大)国文科の1年生。教授から声を掛けられ、夏休みに市役所の会議室で名簿に向き合いました。「二度と戦争は起こしちゃいけない」と誓いながらお名前を書きました」と振り返ります。感覚として覚えているのは部屋の静けさとのこと。「暑いねとかの私語も一切なかった。それほど一生懸命だったんでしょうね」。

伊藤さんは新たな記帳者14人に語りかけます。「どうか皆さん、いつまでも書き継いで平和のバトンを次につないでください」。

「氏名不詳者多数」の1冊

名簿の中には、「氏名不詳者多数」とだけ書かれた(右写真)1冊があります。

平成18(2006)年、氏名が分からないままの人々を追悼するために奉納されました。七文字を書いたのは、30年以上記帳に携わり、令和6(2024)年に亡くなった池電和子さんです。長らく、池電さんと二人で記帳をしてきた中本さんは「毎年、使命感を持って丁寧に書かれていた」と回想します。

名前すら分からないままの人々がいることを、私たちは忘れてはなりません。

小筆を手に一文字ずつ

記帳者たちは、歴史や思いを受け止めながら机に向かいます。一文字一文字に込めるのは、亡くなった人々への追悼と、平和への願い。静かに書き記されるその名前は、これからも未来へと受け継がれていきます。

名簿への登載の申し出を受け付けています

市内に在住で、被爆者健康手帳を持っている人が亡くなった場合、葬祭料の申請などを基に、亡くなった人の氏名を登録しています。被爆者健康手帳を持っていない人などの名簿への登載は、原爆被害対策部調査課が各区地域支えあい課で受け付けています。「広島市原爆死没者名簿登録確認票」をご提出ください。確認票は市ホームページで。電子申請も可能です。

市HP ページ番号 1003092

登載の確認も受け付けています

登載の確認は随時受け付けています。上記の確認票と本人確認書類(運転免許証、マイナンバーカードなど。郵送の場合は氏名・住所・生年月日以外の個人情報は消す)の写しを持参か郵送してください。登載確認ができるのは、死没した人の遺族が親戚の人に限ります。広島原爆被害対策部調査課(☎、☎上記)